『語学教育研究論叢』第 34 号

“想＋０＋Ｖ”から見る“想”について

小栗山　恵

On“Xiang（想）”with Special Reference to “Xiang（想）＋０＋Ｖ”

OGURIYAMA Kei

内容提要

现代汉语中，“想＋Ｖ”和“要＋Ｖ”这两者为表示“希望、打算”，用法类似的的句型。然而从“想”和“要”的语言变化过程中，便可以了解两者的背景有相当大的不同。王力 1985 也曾经提到「“想”是心里想，不是一种要求。“要”有时是心里想，有时是要求。但这分别并不十分显明」，笔者认为「“想”是心里想」它是决定了“想”在语用上发展的重要关键。我们从语言历史发展来看，便可以发现“想＋０＋Ｖ”演变到“想＋Ｖ＋０”的形式之后已经几乎消失。然而“要”的用法则有“要＋０＋Ｖ”和“要＋Ｖ＋０”的两种形式，而不同与“想”，“要＋０＋Ｖ”的用法仍然存在。本文将以这些问题做为切入点，从「“想”是心里想」的性质来试图探讨现代汉语中的的“想”之变化。

０．はじめに

普通話に於ける“想＋Ｖ”は、同じく動詞（句）を後置する“要”と共に願望を表す助動詞とされている。両者の差異について王力 1985 は「“想”是心里想，不是一种要求。“要”有时是心里想，有时是要求。但这种分别并不

十分显明（下線は筆者による）」と述べる。“不十分显明”（明白とは言えない）であるため、初学者にとって両者の差異は“要”が“想”より願望を表す意志が強く、それに伴って使用される副詞が異なる点、及び否定の場合は共に“不想”を用いるという二点を理解すれば良いとされる（相原 2015）。しかし、常々注目される願望を表す語として「“＋０”と“＋Ｖ”の形を作る」（《实用汉语课本》、與水・島田 2009、相原 2006 等）という“想”“要”が共通して持つ特性は、両者の語法機能が偶然にも交差したわずかな一例に過ぎず、実は両者の間には大きく異なる点が存在する。例えば、願望・希望を表す用法に限定し、更に動詞“吃”が後置される例を語法史的に見た場合、“想”は“想＋０＋Ｖ”から“想＋Ｖ＋０”へという変化を遂げたが（宮田 1973）、“要”には“要＋０＋Ｖ”と“要＋Ｖ＋０”だけでなく、連動文、使役文という構文上異なる用法を生じつつ、一方で“要＋０＋Ｖ”という句型をも保存し続けた。この事実は、“想”と“要”が類似の機能を有しながら、その用法上の特性に何らかの差異を内包していることを物語る。

本稿は“想”と“要”の語法機能の違いについて歴史的観点から見ることによって、“想”が特徴的に有する「内向き」な文法機能（王力 1985“是心里想”）がどのように作用した結果、“想”と“要”の用法に如何なる違いが生じたかについて考察を加えようとするものである。

１．“想＋Ｖ＋０”と“要＋Ｖ＋０”の用法（先行研究）

1-1. “想”の動詞用法と助動詞用法

“想＋Ｖ＋０”の“想”は、その多くの用例が助動詞とされるが、動詞に分類されるものもある。《现代汉语八百词》では“想”の例を全て動詞の用法として扱い、「希望する、するつもりだ」を表す場合は、その用法は必ず動詞（句）を後置するとしている。孟 1999 には、動詞を後置する記述はないが、“想”を動詞として扱い、動賓構造として“我想上北京”等の例を挙げている。

a）吕 1999《现代汉语八百词》（增订本）

希望，打算。必带动词宾语。可受程度副词修饰：

我想当探险家。他很想上大学。她也非常想去。

（下線は筆者による。以下同じ）

b）孟・他 1999《汉语动词用法词典》

“想”：希望，打算。【动宾】我想上北京。他想当个飞机设计师。

…略…【加很】很想到西藏作生物调查。

上述のように“想＋V＋0”の“想”を動詞と分類する例がある一方で、王力 1943 が助動詞（“能愿式”）として分類して以来、現在では助動詞として扱うのが主流となっている（朱德熙 1982、鲁 2004、郭 2005、輿水・島田 2009、相原 2015）[1)]。

しかし、郭 2005 は“想＋V＋0”の“想”が予測の意味を持ち得るかについて論じるなかで、“我想回家，也就想想而已”の例を挙げ（下線は筆者による。以下同じ）、“我想回家”の帰省「したい」という願望が予測できないために“我想回家，也就想想而已”と言えるが、それは助動詞用法と非助動詞用法との間に存在する曖昧性に起因するとしている。

c）郭 2005

我想回家，也就想想而已。

注：这似乎说明，助动词“想”的一些用法与非助动词“想”仍有一些瓜葛。

＊我要回家，也就想想而已。

そこでa）吕 1999 及びb）孟・他 1999 の“她也非常想去”“很想到西藏作生物调查”について見ても、“非常”や“很”を用いることが可能であるため、それらを“要＋V＋0”の“要”と同じ助動詞として扱うべきか迷う

ところである。“想＋Ｖ＋０”の“想”を動詞として分類する立場は、更に歴史的背景を含む理由にも起因すると考えられる。その歴史的背景について詳しくは「3」以降で述べる。

1-2. “要”＋Ｖと“想”＋Ｖの単独回答時の差異について

相原 2015 は、“想＋Ｖ”“要＋Ｖ”を助動詞用法と見なした上で、以下の例を挙げ両者の違い挙げている。

d）相原 2015『中国語類義語辞典』

…動作主の願望にとどまり、実現する可能性がない意志は“想”でしか表せず、…一方動作主の必ず実現しようという意志がある場合やすでに行動で意志を示した場合は“要”でしか表せない。

(1)　我想（＊要）帮她的忙，可是我无能为力。

(2)　我的心太乱，想（＊要）哭也哭不出来。

(3)　孩子哭着喊着要（＊想）找妈妈。

つまり相原 2015 は、“要＋Ｖ”が“想＋Ｖ”よりも願望を実現しようとする意志が強いとする。上例(1)(2)からは“想”が「動作主の願望にとどまり」、(3)の例からは「すでに行動で意志を示した場合は“要”でしか表せない」ことが知られる。

“想”によって示される願望が話者の心内に止まるため、その機能は「内向き」であり、“要”は願望が現実に働きかけようとするという点で「外向き」であると言える。こうした特徴に基づいて、相原はこの“想”を「静的心理状態」と表している。両者のこの違いによって、“想”“要”は単独回答する際にも異なる動きをすることとなる。

郭 2005 は助動詞“要”と“想”の用法上の制限について、(4)～(12)の例を挙げ、単独回答する際に後置される動詞の有無より、“要”“想”の差異を述べ

ている。

(4) 我想做老板，他也想做老板。
(5) 我想做老板，他也想做。
(6) 我想做老板，他也想。

(7) 我要做老板，他也要做老板。
(8) 我要做老板，他也要做。
(9) * 我要做老板，他也要。

(10) 他想考研究生，你也想吗？
(11) * 他要考研究生，你也要吗？
(12) 他要考研究生，你也要考吗？

(6)と(9)との比較を通して明らかなように、こうした条件の下において助動詞“要”は例(9)のように、一般に単独で回答できない。

吕 1999 の以下の指摘も、助動詞“要”が同様の特性を持っていることを述べたものである。((13)(14)は筆者による)

e）吕 1999《现代汉语八百词》（增订本）
助动词：表示做某种的意志。一般不单独回答问题。
你要看吗？－要看。

(13) 你要今天的报纸吗？－要。
(14) 你要买今天的报纸吗？－ * 要。

“要”の動詞用法、“要＋０”では(13)のように“要”は単独で用いられるが、助動詞用法“要＋Ｖ”では(14)のように回答時に単独で用いられない。一方、

“想”の例(6)“我想做老板，他也想”や(10)“他想考研究生，你也想吗？（＊他要考研究生，你也要吗？）”は許容される。この“想”“要”両者の差は、“想”が有する「内向き」な性質ゆえに“想＋０”であっても“想＋Ｖ”であっても願望実現への意志は表面化することはないが、一方“要”は「外向き」な機能を有するゆえに実現への意志が明瞭に示される結果として生じたものではなかろうか。“要＋０”と“要＋Ｖ”の機能の差に較べ、“想＋０”と“想＋Ｖ”の機能の差が小さいのも、“要”によって示される願望実現への意志が「外向き」であり、“想”によって示される願望実現への希望が「内向き」だからであろう。つまり、“想＋０＋Ｖ”の「内向き」な性質こそが“想＋０”と“想＋Ｖ”との境界線を漠然としたものにしているのであると考えられる。

2. “想”の「静的心理状態」

表面化することのない“想”の「静的心理状態」以外にも、相原2015が述べる「すでに行動で意志を示した場合は“要”」という観点に基づけば、“要＋０”と“要＋Ｖ”の関係、“想＋０”と“想＋Ｖ”の関係の差を明確にすることができる。“想”は“想＋０”から“想＋Ｖ”へ変化しても、「静的心理状態」を表すため、願望が現実に働きかける意志が表面化しない。一方、“要”について見れば、“要＋０”と“要＋Ｖ”との間には、「内向き」に機能する“要＋０”と「すでに行動で意志を示した場合」の「外向きな」“要＋Ｖ”という差異があるために、両者の間に見られる差が“想”の場合に比べて大きいのである。

f）「“要＋0”“要＋V”」と「“想＋0”“想＋V”」の両者の差異

【動詞】　　【助動詞】

“要（欲しい、必要とする）＋0”→“要（…したい、するつもり）＋V”

…内面的　　…内面的／既に行動して意志を示した場合は表面的（外向き）

【動詞】　　【動詞】

“想（想う、考える）＋0”→“想（…したい）＋V”

…内面的　　…内面的

“要＋0”と“要＋V”及び“想＋0”と“想＋V”のそれぞれの用法の差異について見れば、“要＋0”においてはそれによって内向きに願望が示されるが、“要＋V”においてはその外向きの機能によって表面化した願望が示されるため、両者の差異は大きい。一方、“想”においては、そうした差異は目立たない。“要”と“想”に見られるこうした文法機能は古くから認めることができるので、こうした両者の差が、“要”の用法を多様にし、歴史的に両者の間で異なる変化を生み出す背景の一つになっていると考えられる。そこで、以下では“想”と“要”に関して“想／要＋0＋V”に注目することによって、この句型に如何なる変遷が認められるかを追跡してみたい。

3. 歴史的背景

3-1. “想”の内向性による変遷

3-1-1. 元～五四以降の“想＋0＋V”

“想＋0＋V”は元の時代には現れる。

(15)　我想一口米汤吃。　　《小张屠焚儿救母杂剧》

⑯　想口儿米汤吃。　《小张屠焚儿救母杂剧》

元以降、清に至るまでも“想＋０＋Ｖ”は確認できる。

⑰　若想人肉吃。　《西遊記》27

⑱　只怕害孩子坐月子，想定心汤吃。《金瓶梅》58（宮田 1976 による）

⑲　你只看亚仙病中想马板肠汤吃，郑元和就把个五花马杀了取肠煮奉之
《醒世恒言》3

⑳　我想口绿豆汤吃。　《儒林外史》23

㉑　自己原不想栗子吃的。　《红楼梦》19（宮田 1973 による）

㉒　问宝玉：“可好些了？想什么吃，叫人往我那里取去。”《红楼梦》34

㉓　这样正好，想这个吃。　《红楼梦》34（宮田 1973 による）

㉔　昨日热病，也想这些东西吃。　《紅楼夢》60（宮田 1973 による）

現代語に視点を置いた観点から見れば、“想＋０＋Ｖ”は“想＋Ｖ＋０”の原型の一つであるとされ、“想＋０＋Ｖ”から“想＋Ｖ＋０”への移行は清代には起きていると考えられている。宮田 1973 は、“想＋０＋Ｖ”は早期白話以来のものであるとし、明清白話の“想＋０＋吃”の句型として“想天鹅肉吃”という諺の書き換えに注目し、“想＋０＋Ｖ”から“想＋Ｖ＋０”への変遷過程を明らかにしている。

g）宮田 1973《红楼梦》11

癞蛤蟆想天鹅肉吃(庚辰本)→癞蛤蟆想吃天鹅肉(程甲本，程乙本)[2)]

宮田は、願望を示す“想”の用法は、“想天鹅肉吃”のような動詞用法型が原型であり、清初ではまだ“想＋０＋吃”が優勢であったが、清代中葉にかけて衰退の傾向を示し、“想＋吃＋０”への移行が進んだと述べている。“想＋０＋吃”は清代にすでに劣勢になったとは言え、その後、五四期以降に至るまで使用され続ける（地蔵堂 1992)。しかし清代に現れた衰退の趨勢は近代においても留まらず、普通話成立の過程を反映した版本では、版が新しくなるにつれて“想＋０＋Ｖ”から“想＋Ｖ＋０”へと書き換えられる。

㉕《中国现代短篇小说选》1959　p.88

夜晚若想茶吃吋，总不至于……〈莎菲女士的日妃〉

㉖《中国新文学大师名作赏析丛书 丁玲》1990　p.46

夜晚若想吃茶吋，总不至于……〈莎菲女士的日妃〉

3-1-2. 現代における“想＋０＋Ｖ”

五四期以降の“想＋０＋Ｖ”について見ると、この句型は限られた状況においてのみわずかに使用され続ける。储・程 2008 はこの句型の成立に「“吃肉、抽烟、喝酒”など、社会において大多数の成員が認める需要」を満たすという条件が求められるとする（p.24)。この句型が「社会において大多数の成員が認める需要」を満たす場合に使用されるものであるからには、“想”は必然的に“願望”を示す機能と結びつくことになる。储・程両氏は“想＋０＋Ｖ”が成立する条件として、更に「口語表現のみに用いられ」「話者が…強い需要がありながら、長い間満たされず、尚且つその事柄が依然として実現しにくい環境にあり」「容易に満たされることのない一種の需要について」という極めて実現が難しいにもかかわらず、強く望む場合にのみ用いら

れるとしている。両氏が指摘するこの条件は、正しく旧白話期の“想＋０＋Ｖ”の典型用法である“癞蛤蟆想天鹅肉吃”の表現が備える条件に一致する。

“想＋０＋Ｖ”が成立する条件として储・程2008が指摘する点を整理して、本論の主旨に関わるもの５つを以下に挙げる。

ｈ）储・程2008

①話者に容易に満たされることのない一種の需要について使用される。

a、想西瓜吃；想啤酒喝；想新衣服穿；想书读；想钱花

b、＊想西瓜切；想啤酒倒；想新衣服洗；想书买；想钱取

②典型的機能であればあるほど、許容度が高くなる。

c、想钱花＞想钱赚＞想钱偷

③量や指示詞を表す表現は使えない。

d、想茶喝　　＊想一杯茶喝　；＊想这杯茶喝

e、想面包吃　　＊想一个面包吃；＊想那个面包吃

④努力なしで入手できるものは目的語にならない。

f、？想饭吃 ？想菜吃 ？想水喝 ？想衣服穿 ？想鞋穿 ？想房子住

g、想米饭吃 想中国菜吃 想矿泉水喝 想新衣服穿 想皮鞋穿 想大房子住

上記ｆにおいて、そこで示される名詞が大衆の基本生活に直接に関わるものであるにもかかわらず許容度が低いのは、“饭”“衣服”“房子”が努力せず入手できるものであるからである。

想肉吃　：想牛肉／鸡肉／鸭肉／鱼肉…吃

想水果吃：想苹果／香蕉／梨／葡萄…吃

想酒喝　：想啤酒喝／白酒／红酒…喝

⑤既に手中にあるものは目的語にならない。

＊想票退　＊想钱取　＊想病治　＊想烟戒　＊想工作换

現代口語におけるこれらの用法を、旧白話時期の“想＋０＋Ｖ”と比較するとそれが用いられる際の制限が厳しく、とりわけ③④は旧白話には見られなかった制限である。（前掲例文⑳“想口绿豆汤吃”、㉓“这样正好，想这个吃”、㉔“也想这些东西吃”などは上記储・程 2008 の③にそぐわず、同様に㉑“自己原不想栗子吃的”などは④にそぐわない）。

上記⑤に関して、一般に「お金を使いたい」という表現を“想＋０＋Ｖ”と“想＋Ｖ＋０”の形にして比較すると、以下の２例が想定される。

㉗　我想花钱。

㉘　我想钱花。

储・程 2008 の見解に基づけば、㉗はお金を持っている場合でも用いられるが、㉘はお金を持っていない場合でしか用いられない。ここで指摘されている用法上の制限の下、使用される例は実は清末にすでに認めることができる。

㉙人家想钱用，没得法子，只好卖给他。《官场现形记》35

したがって、現代口語で用いられる“想＋０＋Ｖ”は、旧白話で使用された用法を継承し、その特性を現代に至ってより鮮明化させた句型であると見ることができる。

储・程 2008 は、ハルピン（哈爾浜師範大学国際文化交流学院）、武漢（華中師範大学文学院）の学生を対象にアンケートを行い、“想＋０＋Ｖ”の許容度を調査している。その結果から、“想念”の意味をもつ“想＋０”の目的語について、“想”を“想念”（恋しい、懐かしがる）として理解した場合、多く「人」や「場所」のみに限定されがちであり（“想家”“想孩子”）、そのため「人」や「場所」から「もの」への拡大がまだ不十分であるとしている。このように、储・程 2008 は“想＋０＋Ｖ”において後置される目的語の範

囲が広がる傾向をも指摘し、“想＋０＋Ｖ”が単に衰退の方向に向かったわけではないとする見方を示す。こうした見方は、普通話における“想＋０＋Ｖ”から“想＋Ｖ＋０”という先の宮田 1973 が指摘する流れに反するが、或いは下記ｉ）のとおり武漢方言地域で“要＋０＋Ｖ”という句型が現在でも使われていることに関係しているのかも知れない。

ｉ）朱 1992《武汉方言研究》 p.34

(30) 他力气大，才要饭吃咧。

(31) 这样办喜事，真是要钱用!

目的語が前置される結果、(30)“要饭吃”は“要吃很多饭”の意味となり(31)“真是要钱用”は“要用很多钱”の意味となり、「沢山の（“大量的”）～」という意味を示すものとして使われる（朱 1992)。このように、“要”であれ“想”であれ、“要／想＋Ｖ＋０”と“要／想＋０＋Ｖ”の語順の違いにより、程度や分量が強調される機能が同じである点は示唆に富む。

いずれにせよ、“想＋０＋Ｖ”は現在では口語表現の極めて強い願望のみにしか用いられず、普遍的に使用される用法とは言えない。

以上に示したように、“想＋０＋Ｖ”は“想＋Ｖ＋０”へと変化する趨勢を明瞭に示す一方で、わずかながら五四期以降に至っても用いられ続け、更に現在に至っては、特定の状況下でのみの用法が保存されていることを確認できる。

3-2. “要”の外向性による変遷

“要＋０＋Ｖ”は明初には既に多く見られ、五四期以降にまで至る。

(32) 那妇人问道：“师父，你要酒肉吃么？”

《水滸伝》32（宮田 1973 による）

(33) “既然哥哥要好鲜鱼吃，兄弟去取几尾来。”《水浒传》38

(34) 我要酒吃。 《醒世恒言》9

(35) 特来看世兄，要杯酒吃 《儒林外史》31(宮田 1976 による)

(36) 吵着要肉吃 《红楼梦》6（宮田 1976 による）

(37) …，也发疯似的要水喝。 《林家铺子》3

(32)～(37)に見られる“要＋０＋Ｖ”は、現在にも受け継がれている。

(38) 我要钱买书。

(39) 我要时间看书。

相手に強く要求する（(37)“发疯似的要水喝”）というこの句型が持つ特性は、現代語においても同様であり、強い願望を実現するために欠かせない手段として“钱”“时间”などが目的語として用いられがちである。そのため以下の表現は成立しない。

(40) ＊我要笔用[3)]。

歴史的な観点から“要＋０＋Ｖ”についてあらためて見ると、この句型は明代にはすでに多用されられ、現在に至る。清代には使役を表す用法も確認できるが、唐五代の資料にも見られることからその用法は古く、“要”が古くから多用な構文を有していたことがうかがえる。

(41) 他做大老官是要独做，自照顾人，并不要人帮着照顾。《儒林外史》31

(42) 一朝床上卧，还要两人扶。　〈太子成到经 4〉[4)]

“想＋０＋Ｖ”から“想＋Ｖ＋０”への書き換えは清代作品において見られるが、一方“要＋Ｖ＋０”は太田 1958 が指摘するように古く唐代にはすでに認められる。

ｊ）太田 1958　p.200

“要”じたいが必要あるいは意欲をあらわす補動詞としての用法は唐代ごろからみえる[5)]。

要语连夜语、须眠终日眠（白居易诗）

（語りたいときは連夜語り、眠らなくてはならないときは終日でも眠る）

“要”に関する例について、唐代から明清を経て現在に至るまで概観すると以下のようになる。

(43) 若要添风月，应除数百竿。　〈竹径〉唐・韩愈（卢 1997 より）

（そよぐ風照る月をそえたかったら、数百本とりのぞかねばなりません）

(44) 因说：“你心里要吃甚么，我往后边做来与你吃。”西门庆道：“我心里不想吃。”　《金瓶梅》79

(45) 晚上要吃酒，给我两碗酒吃就是了。《紅楼夢》62（宮田 1973 による）

(46) 便有人要看也不过加上几个密圈写上几句通套批语赞扬一番・・・

《儿女英雄传》1

(47) 王小玉必还要唱一段，不知只是他妹子出来敷衍几句就收场了，
《老残游记》3

(48) 阿Q说是赵太太要看的，地保也不还，并且要议定每月的孝敬钱。
《阿Q正传》6

(49) 成功不成功，没有什么大关系。总之我要试一下。 《家》3

(50) 她是要看王琪瑶的态度再决定她的意见。 《长恨歌》2-6 王安忆

(32)～(37)のような“要＋０＋Ｖ”（要酒吃）が、(43)～(50)“要＋Ｖ＋０”（要吃酒）への変化を遂げたようにも見える一方で、実際には“要＋０＋Ｖ”と“要＋Ｖ＋０”の両者が併存して現在の状況に繋がっていると見ることができる。

以上のように、すでに明清時代には“要＋０＋Ｖ”は“要＋Ｖ＋０”と共に存在し、現在に近い状況になったと言える。更に“要＋０＋Ｖ”には明清時代には用いられた連動文と使役文の二つの用法がある。前者の連動文は、「3-1-2」に挙げた現代における“想＋０＋Ｖ”の用法のようではあるが、“想＋０＋Ｖ”のごく限られた状況下でしか使用できないのに対し、“要＋０＋Ｖ”は“钱”“时间”など、強い欲求を示す時に現在でも用いられる。更に後者の使役文“要”には、“想”（“想＋０＋Ｖ”）と異なり、使役用法としての“要＋０＋Ｖ”という用法も存在する。

このように、“想”と“要”の間の差異は“不十分显明”（明白とは言えない）（王力 1985）とは言え、通時的にも共時的にも少なからぬ相違点を持つ。

４．まとめ

現代漢語において“要”と“想”は互いに類似の機能を持つとは言え、

“要”と“想”の間には、その願望が「外向き」に機能するか「内向き」に機能するかという点で、明瞭な違いを認めることができる。

歴史的観点から願望を表す“想＋０＋Ｖ”と“要＋０＋Ｖ”を見た場合、“想＋０＋Ｖ”は近世語の変遷過程の中で衰退に向かう一方で、“要＋０＋Ｖ”はその機能を拡大させたかの状況を示す。現代において“想＋０＋Ｖ”が極めて限られた状況の下でのみ使用されるのに対して、“要＋０＋Ｖ”は広く用いられる連動文の“要＋０＋Ｖ”の他に使役文としての“要＋０＋Ｖ”までもが存在する。

こうした差異は、“想”が「静的心理状態」を表すに留まるのに対し、“要”が願望を実現する意志の強さを表示する性質を有していることの結果として現れているのではなかろうか。“想＋０＋Ｖ”と“要＋０＋Ｖ”とを比較すれば、“想＋０＋Ｖ”（我想钱花）は独り言に用いられるが、“要＋０＋Ｖ”（我要钱用）は目的語の指すもの（“钱”）が聞き手に対して強く要求される時に用いられる。「2」に述べたように、“想＋０”も“想＋Ｖ”も、話者の心内の願望にとどまり、実現への意欲が「内向き」であるため実現する可能性の低い表現に使われる。そのため、後置される目的語と動詞の語順に変化が起きた程度では、大きな差は生じにくい。用法上の差が生じなければ、元来の形（“想＋０＋Ｖ”）は新しい形（“想＋Ｖ＋０”）に取って代わられ、不要となり、淘汰される方向へと向かいがちになる。一方“要＋０＋Ｖ”はそれと異なり、実現への意志がもともと「外向き」であり、その結果、目的語と動詞の語順に変化が起きれば文法機能の上で大きな差が生じやすい。

こうした背景によって“要”には“要＋０＋Ｖ”と“要＋Ｖ＋０”とが保存され、これに対し、“想”は“想＋０＋Ｖ”から“想＋Ｖ＋０”への変遷過程の中で、“想”の内向きの「静的心理状態」により、“想＋０＋Ｖ”が淘汰された。“要”と“想”にはこうした違いがあるために、その動詞用法や助動詞用法の歴史的変遷過程にも差が生じたのであると言える。

【注】

1) 助動詞が現在の定義に近づいたのは高名凱 (1949) 以降。それ以前は黎錦熙（1924）が現在で言う方向補語を、王力（1940）は“把”“被”などの前置詞をも助動詞としていた（鳥井 2008　P.71-72）。

2) 宮田 1973 では程甲本から程乙本への移行の過程に於ける書き換えとしているが、実際程甲本、程乙本に見られる例は共に“癩蛤蟆想吃天鵝肉”であり、“癩蛤蟆想天鵝肉吃”は庚辰本に見られる

3) この場合は“我要用笔”が相応しい。

4)《敦煌変文校注》p.438。

5)「意欲をあらわす」以外の“要＋V＋O”であれば、唐以前にも見られる（卢 1997）。

【参考文献】

相原茂 2015『中国語類義語辞典』朝日出版

相原茂他 1996『Why? にこたえる初めての中国語の文法書』同学社

郭昭军 2005〈意愿与意图－助动词“要”与“想”比较研究〉

王征、张涌泉校注 1997《敦煌变文校注》中华书局

輿水優・島田亜実 2009『中国語わかる文法』（大修館）

太田辰夫 1958『中国語歴史文法』江南書院

太田辰夫 1988『中国語史通考』白帝社

太田辰夫 1995『中国語論文集　語学・元雑劇篇』汲古書院

王力 1943《现代汉语语法》（下）（1943 出版、1955 改訂）商务印书馆 1985

江蓝生 1988《魏晋南北朝小说词语汇释》语文出版社

蒋平 1983〈“要”与“想”及其复合形式、连用现象〉《语文研究》2

朱建颂 1992《武汉方言研究》武汉出版社

朱德熙 1982《语法讲义》商务印书馆

朱德熙 1995 杉村博文・木村英樹訳『文法講義』白帝社

地蔵堂貞二 1992〈《品花宝鑑》の言語について〉『北陸大学外国語学部紀要』1

储泽祥・程书秋 2008〈制约“想ＮＶ”格式成立的若干因素〉《汉语学习》1

鳥井克之 2008『中国語教学（教育・学習）文法辞典』東方書店

宮田一郎 1973「『紅楼夢』のことばについて(一)」『人文研究』25-3
宮田一郎 1976「儒林外史のことば」『人文研究』28-4
宮田一郎 2005『宮田一郎中国語学論集』好文出版
孟琮、郑坏德、孟庆海、蔡文兰 1999《汉语动词用法词典》商务印书馆
李臨定 1990《现代汉语动词》中国社会科学出版社
吕叔湘 1999《现代汉语八百词 增订本》商务印书馆
黎锦熙 1994《新著国语语法》(1924 出版) 商务印书馆
鲁晓琨 2004《现代汉语基本助动词语义研究》中国社会科学出版社
卢卓群 1997〈助动词“要”汉代起源说〉《古汉语研究》3

【一次資料】

《朱文公校昌黎先生文集 9》(四部叢刊所収)
「韓愈」『漢詩大系』11　集英社 1965
《元刊杂剧三十种新校》下　兰州大学 1988
《水浒传》鐘伯敬先生批評本
《金瓶梅词话》大安影印 1963
《西游记》世德堂本
《醒世恒言》同德堂本
《醒世姻缘传》葉敬池本
《儒林外史》臥閑草堂本
《红楼梦》庚辰本
《红楼梦》程甲本
《红楼梦》程乙本
《儿女英雄传》上海古籍出版社 1981
《老残游记》(1925 出版) 亚东图书馆 1934
《官场现形记》人民文学出版社 1957
北京语言学院《实用汉语课本》1986 商务印书馆
巴金 1986《巴金全集》1 人民文学出版社
丁玲 1959《中国现代短篇小说选》上海书局

丁玲 1972《丁玲文集上》汇文阁出版社

丁玲 1981《丁玲短篇小说选 上》人民文学出版社

丁玲 1990《中国新文学大师名作赏析丛书 丁玲 10》广西教育出版社

鲁迅 1973《鲁迅全集 1 》人民文学出版社

茅盾 1978《林家铺子》人民文学版社

王安忆 1996《王安忆自选集 6 长恨歌》作家出版社